ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと〝風〟

第171号（２０２０年８月）

風に戯れて

白井啓治

（十一）百の恋物語に挑戦

（２００８年８月７日）

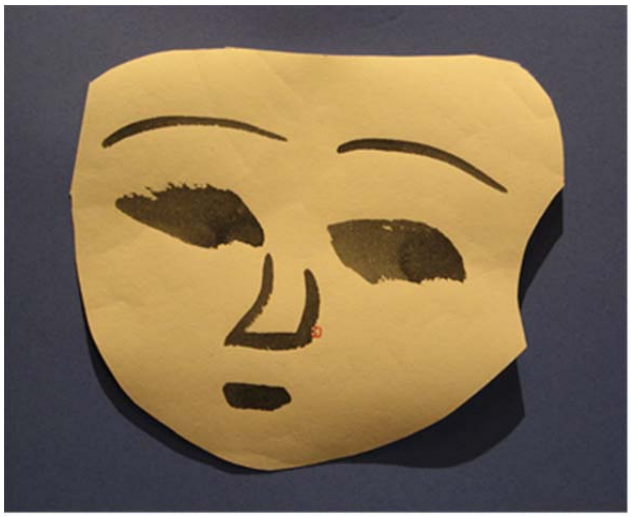
『ぽつぽつとわが心をば声すれど、君ふりかえる影だにゆれず』

歌といえば恋歌になるし、老いのしぐれ歌といえばしぐれ歌にもなる。眠れぬ熱帯夜に苛立ちながら声に呟いてみたが、何とも恨めしい言葉になってしまった。

「物語の生まれない里は滅びる。真実の恋の生まれない里は滅びる」と誰彼の見境なくあう人あう人にそう大声してきた。今も変わらずそう大声している。最初は驚かれもしたが、今では私を知る人達の耳に胼胝（たこ）ができたのか聞き耳を立てる人も居なくなってしまった。チョット寂しいと言えば寂しいのだが、それが私の当たり前となった事は喜ばしいと考えるべきであろう。

そこに人の暮らしがあれば、物語が次々に生まれてくるものである。しかし、それを逆から眺め、考えると、昨日まで語られていた物語が一つなくなることは、昨日まであった人の暮らしが一つなくなってしまうことを意味する。

暮らしの中に物語が次々に生まれてくると言うのは、その里には将来への希望が沢山紡がれているということである。そして、将来に生きる希望の一番大きなものとは恋である。好きになる人の居ないところには留まる必要は生まれない。留まる必要がなくなれば暮らしはなくなる。だから、恋の物語の生まれない里は、絶望であり、滅びる。



（絵：兼平智恵子）

聾の女優さんである小林さんと出会い、一緒にふるさとを表現する舞台を作っている。劇団を作るとき、ふるさとに百の物語を創り発表しようと話した。そうしたら恋物語がいいと小林さんから言われ、実に嬉しい希望を感じたのであった。それで、常世の国の恋物語百に挑戦することになった。百の恋物語を創り終えたとき、このふるさとに百の新しい暮らしが生まれてくれたら実に嬉しい希望であるが、果してどうなるものやら。せっせとふるさとの歴史・文化を調べながら、見つけたモチーフに恋をしているのであるが、まだ十と五つの恋が終わったばかりである。百に届く前に死暮れてしまわないようにと願うばかりだ。

（本稿は故白井啓治氏が常陽新聞に2008年7月より約1年間に亘り掲載されたエッセイを載せています。）

（追伸）本記事にある「百の恋物語」はついに未完のまま先生は旅立たれてしまった。新たな物語を生み出すという作業は並大抵ではなく、後を継ぐことができないでいる。大変申し訳ない気持で一杯だ。ここに、以前私の書いたブログにいただいた先生の詩を掲載させていただきます。（木村）

『風のこえ』

白井啓治

何時も呼んでいるのに
なぜ聞こえないふりをするのですか。
あなたがきっとわかる様にと
私の言葉を文字にも書いて風に声しているのに
あなたは何時も聞こえないふりをしてしまう。
それは私の事を嫌いだという事ですか。
かまいませんよ。
あなたに嫌われても私はあなたを呼び続けます。
そして、
私の呼ぶ声を風に運んでもらいますから

故白井先生の魂

小林幸枝

6月27日、ふるさと風メンバーで、故白井先生の1周忌に、先生のお墓にお参りに行きました。

翌日、私宅の裏ブロックを剥がす作業中に、何処からともなく、今までに見た事ないもないブルーの羽根を持つ黒蝶が飛んできました。とても綺麗な蝶でした。私は、あまりに美しく珍しいので、どこから来たのだろうと不思議に思いました。

そうだ！　これは、きっと故白井先生の魂じゃないのかと思いました。

蝶は、ふわふわとあたりを舞って、まるで風に戯れて自由に旅立った先生の姿が見えるようでした。すぐに、白井先生の奥さんに連絡してみました。奥さんから、絶対、ひろじぃ（主人）です。「見ると幸運なれる」という伝説があるんですよ。と返事が来ました。

オオルリアゲハという蝶でした。一目見た時に、全身に、鳥肌が立つような気がしました。こんな美しい蝶は初めて見たのでした。そして、とても嬉しい気持ちになれました。こんな美しい蝶が見られてとても良かったです。本当に幸せだと感じました。白井先生ありがとうございました。これからもゆっくり旅しながら楽しんでくださいね。

ありがとう。

地域に眠る埋もれた歴史（63）　木村　進

【八郷地区】（6）

2.8　地磁気観測所

明治16年（1883）に東京赤坂の中央気象台に地磁気の観測所が設置された。それから、地球規模の地磁気の変動を観測し太陽の爆発などの影響による磁気嵐や、磁場の方向観測などが絶えず行われてきた。その後も火山活動の予測などにもこの観測が必要になっているが、東京は次第に市電などが走るようになると、その電車の直流などの影響が地磁気観測を狂わせてしまうようになってきた。

そこで観測するには周りに邪魔なものが無く地磁気も安定して測れる場所を探し、大正2年（1913）に石岡市（旧八郷町）柿岡の通称富士山と呼ばれる小山の麓にこの地磁気観測所が移された。

それから100年間、戦時中も休むことなく地磁気の観測が続けられ、データは世界中に毎日発信し続けられている。この柿岡以外にも北海道、鹿児島、小笠原にも測定所はありますが有人のところはこの柿岡だけだ。

毎年秋に施設内の見学会が行われている。

この地磁気観測所があるために常磐線はこの区域では直流電車を走らせることが出来ずに、交流直流両用列車を使い取手の少し先で交流に切り替えています。

地磁気観測には短周期観測と長周期観測の2種類があり、直流電流の影響を受ける心配のあるのは短周期観測だけだそうです。そのためこの短周期観測の場所を新たに探して移転すれば電車を直流化することができるとの見解もありそろそろ本格的に検討する必要があるかもしれません。

もう建物は結構古く、敷地内には職員用と思われる住宅もいくつかあるのですが、近代的とは言えない建物でした。

2.9　如来寺

如来寺は親鸞聖人の二十四人の弟子　第四番乗然房領海により建てられた寺である。ここは親鸞の弟子が残した24箇所の寺の一つである。　場所は旧八郷町役場（現八郷総合支所）のすぐ裏手

にある。乗然房領海は上野国片岡郡の武士で、片岡源九郎親綱といった。兄が命により鹿島神宮の大宮司となり家名を継いだが、この兄が鹿島明神のお告げにより親鸞の第３番弟子（順信房）となっていた。親綱はあるとき本尊の霊夢により、建保３年（１２１５）に稲田の親鸞聖人の草庵を訪れ、４番弟子となった。聖人の形見として太子像を賜り、「帰命山無量壽院如来寺」と号し、霞ヶ浦岸辺の木原に草庵を建てたのが始まりで、明応７年（１４９８）にこの地に移された。隣に芭蕉の句碑がある。

『能く見れば薺（なずな）花咲く垣根かな』

木原の草庵は、聖人が村人の請いによって湖の沖合に光るものを網にかけたところ、一体の阿弥陀如来像であったため、この縁を喜ばれて建てられたものといい、後に現在の地に移転してきた。そして聖人のお弟子になった乗念坊は信田（志田）の浮島に草庵を建て念仏の道場にしたと言うのが如来寺の縁起です。また仏像を奉った漁師は親鸞上人の教えを受け，阿弥陀仁左衛門と呼ばれたといいます。この阿弥陀如来像は現在滋賀県野洲市木部の錦織寺に奉られているようです。

主本堂に「聖徳太子浮足の像」が残されています。浮足の像とは、太子像の足が、台上から半紙１枚が通るほどの空間を保ち、身体が浮上していたことにより『浮足の像』と呼ばれています。

【片野・根小屋地区】（１）

3.1　泰寧寺-山県大弐の墓

常陸風土記の丘公園のすぐ先より茨城県フラワーパークへ続く立派な農道が完成している。その途中の根小屋地区の入口に泰寧寺（たいねいじ）がある。ここに江戸時代の大学者でその勤皇思想で幕府を批判した罪で処刑された山県大弐（やまがただいに）の墓がある。またここは禅寺で、春から秋に数回座禅や写経の体験学習が受けに全国各地より体験希望者が多く訪れる。

山県大弐は甲斐（山梨県）に生まれ、医を業としたが、神道・儒教・仏教の教養深く、宝暦年間、江戸にでて塾を開き、国典・兵法を講じ、大義名分論を唱えた。その著書「柳子新論」で尊王を説いて幕府を批判したため、明和四年（1767年）43歳で処刑され、小塚原の刑場にさらされた。

泰寧寺（たいねいじ）

山県大弐の墓（県指定文化財）

その時、山県の門弟であった根小屋出身の園部文之進外２名が見るにしのびず、夜中ひそかに首を奪って帰郷し、自宅の墓地に埋めてそれ

を家人に告げ立ち去ったといわれる。やがて明治になってからその遺骨はここ泰寧寺墓地に改葬され、贈位の恩典にも浴した。法名は卓栄良雄居士と過去帳に記されている。（石岡市教育委員会）

山県大弐が江戸に出たのは27才の時であり、儒学と兵学を講じ門人も三千人にも及んだといいます。　山県大弐の墓は生まれ故郷である山梨県甲斐市（旧竜王町）の山県神社と東京都新宿区全勝寺にもある。大弐は江戸に出た時、四谷坂町に住んでおり、夫人の里方の菩提寺である全徳寺に埋葬されたが、廃寺となったため全勝寺に移された。大弐は吉田松陰らにも影響を与えた思想家であり、処刑されたのは明治維新の100年前です。

片野城の城主・瀧川氏の墓

（大弐の墓の隣）

また境内には片野城の城主・瀧川氏の墓がある。瀧川氏は元々、伊勢の武将であったが、織田信長の家来の瀧川一益から姓をもらい瀧川姓となった人物です。佐竹氏が秋田に転封になった後を受けて、慶長９年（１６０３）に片野城に入り、新治郡内２万石の大名となったが、跡継ぎがいないために没収されて廃城となってしまった。

城里町の花の寺として知られた「龍谷院」を前に訪ねた時に、その寺の末寺の中にこの石岡の泰寧寺の名前がありました。寺の紋は月丸扇の紋で、佐竹氏の紋です。この寺は佐竹氏の秋田移封後に片野城に入った滝川氏の菩提寺だったからでしょう。

（続く）

我が労音史（21）

木下明男

20代に参加した労音運動は、1970 年からは労音の中心活動家として参加しています。そして、労音改革の責任者の一翼を担う様になり、実践の中から学んだ内容を記述していきます。

1991 年の社会情勢と音楽状況

多国籍地上軍がイラク・クェートに侵攻。政府・自民党は湾岸戦争に90 億ドル拠出。ワルシャワ条約軍事機構が解体。ユーゴスラビア連邦は内戦状態となる．ソ連でクーデターが失敗しソ連共産党が解散しソ連邦が崩壊、独立国家共同体が発足。ゴルバチョフ大統領が来日。九州普賢岳に大火砕流発生し、死者行方不明者41名の被害。日本各地でモツアールト200 年記念のコンサートやシンポジウムが開催、第一生命が生家復旧支援に五億円を拠出。

この年に逝去された著名な文化人・音楽家は、貝谷八百子（バレェ）池内友次郎（作曲家）山田一雄（指揮者）中川一正（洋画家）ディックミネ（歌手）蔵原惟人（評論家）井上靖（作家）野間宏（作家）大築邦雄（作曲家）ケンプ（独ピアニスト）ゼルキン（ピアニスト）アラウ（Chili・ピアニスト）イブモンタン（仏歌手）ディヴィス（同志社大学創立）

1991 年の労音の動き

第39 回総会は目標として

1）昨年の成果を前進させ、地域労音として独立を目指す。

2）3ヶ年計画で未達成に終わった「10000 名の会員」「1000 サークル」「300 名の委員」の目標を引き続き掲げる。

3）地域独立採算制で地域中心の活動になっているが、組織的には東京労音として一つである事を認識し、中央に集中する。運営委員会・専門委員会・委員会の充実を図り発展させる。

4）労音運動にとって重要な機関紙の再刊を果たす。

を確認し活動を進めてきた。

結果、独産体制への移行前から比べると例会数が増え、その例会成功率も高くなっている。例会参加者数の増加により健全財政も確保している。独算体制進行の中で、府中センターを拠点として活動している都下ブロックでは、空白地域にコン

サートを企画し、労音の存在を広めた。民俗音楽教室や演奏サークルの活動を活発にしている東部ブロックでは、自治会・保育園・学校・職場組合からの出演依頼が多く寄せられ、地域に根ざした活動で協力関係を築いている。

諸々の成果はあったが、「10000 名の会員」「1000 サークル」「300 名の委員」の目標は未達成に終わり、機関誌の発行についても人員の確保が出来ず再刊が叶わなかった。

今年の第九は、5 年ぶりにソリストのオーディションを行い、若手ソリスト（小浜妙美・佐竹由美・永田直美・大野光彦・長野敏夫・長谷川寛）を選出し、東京文化会館とサントリーホールの二会場で行う。合唱団は昨年より 100 名増え（296 名）宇宿充人指揮、管弦楽・フィルハーモニーTOKYOU の演奏で、二会場を満席にし成功させた。

この年企画の柱「モスクワ音楽劇場バレェ」は、労音がモスクワ音楽劇場バレェ団に委嘱した作品で、タカクラテル原作の「ツルの巣ごもり」を中心に取り組んだが、他演目の「白鳥の湖」「ジゼル」は組織的に成功した。然し委嘱作品は入らず要因として、①作品内容に関してバレェ団との討議不足があった。②新作バレェにも関わらず対外的に話題作りが不足であったん。③労音内部での意思統一が弱かった。があげられ、今後の創作活動を進めるうえでの教訓となった。またバレェ例会については、各国からの来日が続き、競合するという状態が数年続いて、今後の大きな課題となっている。

「高石ともやとトム・パクストン夏のコンサート」は、年末企画として定着している“年忘れコンサート”に加え、夏には海外からのゲストを迎え、フォークソングの守り発展の意図で計画した。都心ブロックと合同の例会として、フォークソング愛好家に向け積極的な組織活動を展開し、会場を満席にした。トム・パクストンの歌も好評で今後の企画に新たな展望が生まれた。また「美輪明宏」例会は、労音として 14 年ぶりの企画で不安もあったが、要求が高く反戦コンサートのテーマに説得力が生まれた。この成功を足掛かりに、東京開催の「労音大学」の記念公演が実現。更に、ハマ音・都下ブロックの企画にも予定され、全国の共同企画として行くことが検討されることになった。

労音招聘企画として定着してきた、旧ソ連の民族アンサンブルシリーズは、「ウラルコサック民族アンサンブル」を取り組んだ。昨年年末に 10 名の代表団（木下団長）をロシアに派遣して交流を深めた事が力になり、東京で 7 回、全国で 25 回の公演を成功させ大きな盛り上がりを生んだ。春と秋に定着している「高橋竹山」津軽三味線例会は全ブロック 8 例会全てが成功した。

各地域センターを使った例会を取り組み、十条センター。大久保会館アートコート・お茶の水センター・東部センターを中心に 29 回の例会を行った。その中で、十条センター・お茶の水センター・東部センターでの「センター寄席」は、地元にも好評で 68 回のサークル例会を企画し、地域・職場に向けた活動を展開。労音合唱団は、北川剛を偲ぶ「ロシアを歌う夕べ」・「第九」合唱・出前演奏（集会やイベント会場に出向く）を柱に活動展開。北川剛ゆかりの合唱団（白樺）と協力し第九満席の力とした。

民族音楽教室は、東部・都心・南部・城北と民権の 5 教室が活動。伝統音楽例会での共演や地域での演奏活動を行い、地域と労音運動との繋がりを強めてきた。車人形教室は、葛飾地域で行われた親子コンサートと城北ブロックの例会に出演。定例会では（週一回）新曲“まんざい”の練習と民話などを素材にした新作制作に向け、人形制作を進めている。人形の胴・手足を創ることで人形での愛情を深め、より高い芸能を目指すことが狙いです。そして新しい担い手を作ることも求められている。

5 月に中央区の勤労福祉会館で、23 団体・503 名が参加し「第 12 回労音大学」が開催された。記念演奏として、「ウラルコサック民族アンサンブル」「高石ともや」コンサート、記念講演として山口啓二（民族学者）岩井宏之（音楽評論家）の二人を迎え、熱気にあふれた交流が行われた。「冬の友好祭」は蔵王で 109 名参加のもとに開催。第 36 回全国会議は、十条センターで 48 団体 96 名が参加して行われた

つづく

石岡市指定文化財（二十五）　兼平智惠子

この度の九州をはじめ岐阜県長野県においても七月の豪雨により被災されました皆様に謹んでお見舞い申し上げます。
災害の後も降り続く雨、更に新型コロナウイルス禍の中、被災者の皆様に一日も早い復興と心休まる場が得られますように、そして皆様のご健康を心よりお祈りいたしております。

・あなたの思いやりが
　地域を　日本を　世界を救う

♪　泣いて生まれて響く命　きっと嬉しくて笑っているんでしょ　♪　毎朝流れてくる音楽から心あたたまる安らぎと元気を頂いております。
それは七月の四連休二十四日のことでした。
テレビ放映のインタビューで「俺はコロナにぜったいかからない、マスクもしない！」と高らかに言う二十代の青年。このことが若年層感染増の要因と情けなく、納得するのでした。
それにＰＣＲ検査の増で軽症、無症状者が増加、完全隔離が何よりも感染防止と思いきや、育児や高齢者介護、ペットの世話等で自宅療養を選択する人達が、宿泊療養に比べ２・３倍に達するとか……。
これでは　「懸命に命がけで命を守って下さっている」　医療関係の皆様に本当に本当に申し訳ないです。　もし感染した場合のご自分の家庭環境の整理と身の振り方を考えておく。高齢者は初心に戻ってそつなく「新しい生活様式」を心懸けたい。
（七・三十記）

本題の文化財紹介に入ります。

府中城の土塁
石岡市総社一―二
史　跡
昭和五三・八・二三指定

石岡小学校敷地内にあります石岡市ふるさと歴史館と今年の三月に閉館となりました石岡市民会館との間に小高い土手があります。
うっそうとしたエノキの巨木数本と共に石岡小学校の校門の両側に続いて残こされている土手が、今から約六百五十年余り前に築城された府中城の土塁です。
府中城は第十五代大掾詮国が正平元年（一三四六）より数年を費やして築城したもので、城の広さは東西五〇〇ｍ、南北に四〇〇ｍで、本丸・二の丸・三の丸・箱の内出丸・磯部出丸・宮部出丸を備え、また幾重にも土塁や堀を巡らし、当時としては堅固な城郭であった。

中世においても石岡は常陸国の中心でした。
地方行政官庁である国衙（役所）には五十人を超す在庁官人が政務をつかさどり常陸国を支配していました。　その中でも桓武天皇の血を引く高望王（平の姓を賜る）を始祖とする常陸大掾氏（大掾という役職名が世襲されることによって家名になった全国でも珍しい例）は、最高権力者として代々その任を担ってきました。
西暦九三〇年平高望の子国香（良望）が初代として、国香の孫、平維幹（これもと）が二代目として、八代目は馬場資幹（ばばすけもと、水戸城主であった）が大掾家を継ぐことになり、馬場大掾氏（一二二四年、府中石岡城を築城されたと言われている）として続きます。
時代は過ぎて第十五代大掾詮国は、先に述べました通り府中城を築城されました。
しかし鎌倉時代の終焉とともに南北朝という混乱の時代を迎え、大掾氏は南朝方から北朝方へと転じ足利氏とのつながりを密にして勢力を拡大していきました。がそんな隆盛を極めた時代も過ぎ去り、天正十八年（一五九〇）第二十四代大掾清幹、弱冠十八歳は常陸國の北部の佐竹義宣に攻められ敗北、燃え盛る府中城で自刃したと言い伝えられている。

六百五十余年の世を語る府中城の土塁は大切な大切な文化遺産です。

参考資料　いしおか一〇〇物語
石岡散策コース案内

ピカピカの一年生

伊東弓子

今年の一年生は、例年より二ヶ月以上も遅れての出発だった。集団登校で大きい子達の足に合わせて、背中には重いであろうランドセルを背負って、黄色い帽子をすっぽり被って一生懸命歩いている。そんな姿を毎日見て安心した。二ヶ月以上も遅れての出発となったが、その間一人一人はどんな気持ちで過ごしたのだろう。入学式も今迄とは違う形で行なわれた。授業も午前、午後と形を替えての状況を“大変だったろう”“可哀想に”と、固定観念で見たり、言ったりしている私たち大人の何と多い事。子供はもっと柔軟性があって、素晴らしいのだと改めて気付かされた。明るい「おはようございます」の声に喜びを感じた私だった。

こういう状況の中で、六十年前の子供達のことを思い出していた。集団生活半年でピカピカの一年生になった一人一人の事が懐かしく、会いたくなった。先ず手紙を書こう。と思い立つとすぐ下書きを始めた。呼びかけは「ちゃん」としたいが、大人になった人達には「さん」だろう。そしてたよりを書いた。

手紙の文は

……さん

花の季節をむかえても新型コロナヴィルスのせいか、晴れやかな気持になれずにおります。いかがお過ごしですか。

昭和三十五年四月は、小学校へ入学された年ですね。早いものですね。あの日から六十年も経ちました。

社会人として活躍され、ご苦労を越え、人生を送ってこられたことでしょう。

亡くなったお友達もいます。ご冥福をお祈りいたします。

当時、経験も浅く何も出来なかった十九才の私を支えてくれた“あなた”がいたことを有難く思っています。感謝と共にたのしい想い出を沢山頂いたこと嬉しい限りです。私の人生を支えてくれたお一人お一人です。

地域の人々、お寺の総代、世話人の方々、民生委員さん達、先輩の先生方、おじいちゃん先生、おばあちゃん先生、節子先生、中学生だったお兄ちゃん、部屋飾りや絵を書いてくれた高校生のお姉ちゃん、多くの方々に助けていただきました。

これからは、体に気をつけて、豊かな心で人生を重ねて頂きたいと願っています。

おおきな区切りの年なのでお便りします。

令和二年四月五日

七十九才　由美子

（手紙文終わり）

そのたよりを持って一人一人尋ねた。家を継いだ子、嫁に行った子、近所の町へ所帯を持った子、亡くなった子、仕事を続けている子、定年で勤めは止め家や地域の為に力を出している子、中にはアメリカで日本食店を経営している子、皆、六十代半ばになっている。元気そうだった。

便りを届けてから数日すると、手紙や電話が届いた。六十年前の六才当時の心に残ったものを伝えてくれた。

○Yちゃん（女の子）から電話をもらった。

庭での遊びは楽しかった。本堂の縁の下での蟻地獄ほり、畑の土遊び、お墓に三輪車を隠したりしておいたことも・・・。電電山が遠く高く見えていたが、今見ると近いのには驚いた。昼ご飯の時に卵焼きを落としたことがあったとか、傍にいた先生が自分の使っていたお箸をひっくり返して、さっと拾ってくれたとのこと、幼い目がそういう一瞬を確り覚えていたという驚き。

○小学校の帰りに必ず寄ってくれたTちゃん（男の子）と話した。

ひとっきり遊んでいきたかったとのこと。特別な話しはしなかったが、安心出来る場所だったという。学帽を見せて私に被せて笑っていた。

○Yちゃん（男の子）のお母さんから

Yちゃんはカレーが好きではなかった。あるカレーが出た日、洋服のポケットがびしょ濡れだったそうだ。

余っ程食べるのが厭で、ポケットへ流し込んだのだろうと思うと、驚くよりも本人の心はさぞ辛かったのだろうと想像した。

○Kちゃん（男の子）には、選挙のことで歩いていた時、偶然何十年ぶりかで会った。

その時の表情が暗かった。当たり障りのない言葉を見つけ話しかけたが、余計硬ばった表情になるのを感じた。あれこれ言葉を捜して問いかけてみて分ったことは、幼い時の厭な想い出が心に残っていたようだった。詳しく聞かずこれからの付き合いの中で・・・心を開いてもらうようにしよう。

○Tちゃん（男の子）から手紙が来た。
保育室を兼ねた照光寺本堂の室内で過ごした一つ一つは貴重な体験だった。発表会で舞台の上で緊張しながらも花咲じいさんの役を演じたこと、花まつりは手作りの白い象の背中にお釈迦さまを乗せて荷車で遠くまで引いたことなど、楽しかったことが思い出されます。先生方の注意も聞かないで、境内の墓地に隠れたり電電山へ登ったり、喧嘩をしたことも懐かしい一つ一つです。

○Aちゃん（男の子）とは、お家を訪ねた時、話をした。
学帽と学生服を着ていたお兄ちゃんがいて遊んでくれたのが、とても印象に残っている。あの時のお兄ちゃんが今、お父さんの住職さんですよね。高校生のお姉さんがいたのも覚えています。優しいお姉さんでしたね。と語ってくれた。

○同じ道を歩いてきたKちゃん（女の子）　会う気ならいつでも会える存在だ。
沢山の苦労を抱えたり、背負ったりしながらいつも心にかけてくれている。髪の心配やらお喋りの相手もしてくれた。広い花、黄色い花、藤色の花のことでもきちんと調べ、若い人達への指導も怠ることなく行ったくれた。この頃一寸変った。すっかり大人になったのだろうと・・・思ってあげることにした。

六十年前の六才の子達の心に残ったものを知ることで、人の心や育つ喜びを改めて知った。

欲張って、私がピカピカの一年生の時を思い出してみよう。特に入学式の日の事を確り覚えている。母は胃が悪くて行かれず父と行った。木造づくりの長い校舎三つの部屋を抜いて大勢集まっていた。終戦後間もない昭和二十二年四月だった。お客さんらしい人が座ったり立ったりしていた。村長、助役らしい人は覚えがないが、収入役さんのことは確り覚えている。隣の家の伊三郎お爺ちゃんだったからだろう。入学の子は木の椅子で前列、親は後ろに立っている。在校生達のことは覚えがない。私の前の子は女の子。何の理由か分らないが、心の中で“この子、変なの”と思って頭を突っついた。と同時に父の声「こら！由美子」と、雷が飛んだ。そんなことはあったが学校は元気に行った。一から十までやっと数えられるようになったのも時間がかかり名前（五文字）も書けず、毎日学校へ行く前に練習させられたが覚えるのに時間がかかった。腕白この上ない一年生時代、新しい中学校制度になり、当時空いていた部屋は中学生が大きい体で入っていた。

毎年毎年ピカピカの一年生を迎える。来年も一年生がお祝いを受けることだろうが、わたしの故郷は小・中一貫校という形で出発する。一年生から九年生までが生活し、学び合っていくことだろう。明治八年、十年、十三年に出来た三つの小学校から昭和二十二年に二つの中学校が出来て、一四五年の来年には一つになる。小さな村の学校教育の歴史、この間、どれだけのピカピカも一年生を産み出したことだろう。次の時代に育っていく子たちの為に“ふるさとづくり”をみんなで考えていこう。活動していかねば何も変わりません。

『耳守神社　（2）』

小林幸枝

小美玉市に、耳の病にご利益あると云われている日本でただ一つの神社があります。
「耳守神社」です。

おそらく知っている方しか足を運ばないでしょうが、他にはないご祭神、耳千代姫を祀った神社です。
耳に不安のある方はお参りされてみてはいかがでしょうか？

そこに伝わる民話「耳千代姫」を、紹介します。

『むかしむかし、いまの栗又四ケは平国香（たいらのくにか（甥は平将門））の孫である飯塚兼忠によって治められていました。

兼忠には妻と可愛らしい娘がいました。娘は千代姫といい両親からとても大切に育てられていました。

しかし、千代姫は兼忠から話しかけられても返事をしないときがあります。千代姫は耳がきこえなかったのです。兼忠は千代姫が育つにつれ、娘の将来が心配になりました。また、千代姫も自分が他の人と違うことに気付きはじめました。そこで、兼忠夫婦は娘のためと覚悟を決めて、熊野の神様に断食をしながら願掛けをしました。

それから数日すると千代姫が驚いた表情で夫婦のもとにやってきて、なにかを伝えようとしました。言葉にできませんでしたが、千代姫の耳はきこえるようになったのです。

千代姫の耳はだれよりも優れていました。そんな千代姫のことを里の人々は親しみを込めて「館の耳千代様」と呼んでいました。

千代姫が３３歳を迎えると、ささいな病が次第に悪化して不治の病となってしまいました。死期を悟った千代姫は「自分が死んだらこの地に神社を建ててください。わたしはそこで里の人々を耳の病から守りたいのです」そう両親に伝えると、そのまま息を引き取りました。

その後、千代姫の遺言どおりに神社が建てられ『耳守神社』と名付けられました。神社の神事は代々飯塚家が引き継いでいきました。

耳守神社のご祭神は耳千代姫こと千代姫命。境内の石碑にも書いてあります。是非読んでみてくださいね。

残念ながら、1590年に飯塚氏が佐竹氏に滅ぼされてしまったので、代々の歴史は途絶えてしまいました。でも、飯塚氏に変わってこの地方の方々が神社と神事を引き継いでいました。そのおかげで１９８３年に神社を再建することができました。』

耳守神社の他に「耳の病にご利益」のある神社はないそうです。とても珍しいので、是非、足を運んでみてくださいね。

〈父のこと　２３〉

菊地孝夫

〔豪雨〕

今日の時点（７月１０日）で、熊本など九州地方は豪雨災害に襲われている。すでに各地では、死者、行方不明者が８０人を超え、連絡のつかない孤立している集落などもあり、被害の実態はさらに増えると予想されている。これから1週間ほどは梅雨明けしそうもない。

安倍総理も現地視察で熊本入り。

家が流されたり、道路が寸断されたり、田畑が冠水したり、経済的被害も大きい。家屋などは、簡易なものにして、多少は不便でも、あまり金をかけず、容易に建て替えられるものにした方がよいのかもしれない。何十年と住み続けられる家はもはや、諦めるしかないのかもしれない。

雨が収まれば、復旧作業に追われる。ボランティアも、コロナを考慮して、県外は遠慮してもらうという方針を取っている。首都圏などの感染者が多くいるところから多くの人が被災地に駆けつければ、二次感染が広がる可能性がある。

例年の梅雨は、しとしと、じとじとしたものだったが、近年は台風並みの豪雨が繰り返し襲ってくるようになった。四季の移り変わりが、酷暑と厳冬に代わり、秋と春が短い期間で終わってしまう。

昔だったら間違いなく凶作となり、多くの餓死者が出たことだろう。青果物も長雨の影響と、コロナによる流通が滞り輸入も減り、高騰し続けている。

地球温暖化がその主な原因と思われる。シベリ

アの永久凍土地帯では、３８度を超える暑さとなって、凍った地面が溶け出している。
世界中の氷河や氷が溶け出せば、海水面は上昇する。低地の洪水被害も、続出するであろう。
私たちの地球が、人類に対して牙をむき出し始めたのだろうか。
温暖化は一過性のものではなく、今から対策をとっても、その進行を止めることはできそうもない。国や地域によっては、経済が優先され、森林破壊をとどめることをやろうとしない、かえって促進している。
やがてそのツケが回りまわって、将来的に自分たちに降りかかってくることになるであろうけれども、目先の利益のために、やめようとはしない。
未来の子孫たちに、美しいままの地球を残すことは、大事なことではあるけれど、目先の利益を追求していく限り、今の経済体制を崩すことは難しい。
間もなく梅雨も明けて、この号が出るころには、連日の猛暑となることだろう。あるいは逆に冷夏となるかもしれない。最新の技術をもってしても起床の予測は難しい。気象の数値も、どんどん更新されてゆく。日本だけでなく、あらゆる国で天災が発生する。
段々に人類の棲むのに適した土地が狭まってゆく。人口の増加は、いずれ減少に転ずるとしても先進国を除き、まだまだ止まらないだろう。
食料生産がそれに追いつくこともなく、後進国では飢えが蔓延する。食料を求めて争いも起きる。逆に一部の国では、飽食によって肥満が問題となり、ダイエットに血道を上げるという変なことになっている。
日本は、食糧の自給率が半分以下である。諸外国からの輸入に頼らざるを得ない。スーパーで売られている食材の原産国は、世界中にわたっている。これは極めて異常なことと言える。
他の国の食料を金に飽かして買い込んでいる。いずれその付けが回ってくることだろう。
そうなったとき、どうすればよいのだろうか。食料品の値段が上がり、相対的に貨幣価値が下がる。今奈でかろうじて食べることができた貧困層は、真っ先に飢えていく。北朝鮮や、アフリカなどの現在が、他人事ではなくなる。

〔グリーンカード〕

狭い国土に人がひしめき合っている。田畑も住宅や工場などになって随分と失われた。
離農する人が多く、休耕田や、耕作放棄地が多くなった。今から就農人口を増やそうとしても、若年層の人口が減り続ける限り、労働力の確保は難しい。農業や漁業などはどうしても人手がかかる。
かといって、アジアの国々から若年層を呼び込もうとしても、果たしてどれだけ来てくれるだろうか。
既に多くの主に若年層のアジアの人たちが来日して働いている。それらの人たちがこの国の経済の底辺を支えている。
それらの国では、日本に出稼ぎに行くことによって、経済的には潤うが、家族が長い間離れ離れとなり、幼い子供は、父母の顔さえ覚えていないという事もある。高額の航空運賃を支払って、頻繁に行き来できるものでもない。
まことに悲しい光景である。一昔前の日本での東北地方からの出稼ぎの様子が思い起こされる。
いっそのこと国籍の取得条件を緩和して、永住してもらうという方法もあるけれども、なんだかんだ難癖をつけて、一向に進んで行かない。
反対するならその本人が、彼らに代わってきつい労働を担えばよいのだが、この連中は、口先だけで労働はしない、できない駄目な奴らである。
単に働きに来てもらうだけでなく、彼らの日常に寄り添い、同じところに住むご近所さんとして受け入れる事。言葉の壁を乗り越えて交流すること。これが真の意味のグローバリズムである。
彼らが住みやすい国は、私たちも住みやすい国のはず。

〔直木賞〕

今期の直木賞は、馳星周に決定。個人的にファンであるので、受賞はうれしい。受賞が遅すぎたくらいである。ペンネームは周星馳（シュー・シンチー：カンフー・サッカーなどに主演）という中国系の俳優からとったもの。
私にとっては、久しぶりのちょっぴりいいニュース。
最近は犬を主題にしたものが多いけれど、私は以前のダークシティものがいい。

〔糖尿病〕

母は長いこと糖尿病で苦しんだ。悪化すれば、足の指を切断しなければならない。若年層にも広く患者がいるという。一つには、ジャンクフード

の弊害があると思われる。油ギトギトのから揚げを、糖分がいっぱいのコーラで流し込めばそれだけであっという間に血糖値が上がるだろう。それにフライドポテト、フライドチキン、ハンバーガー、ポテトチップ。甘ったるいサワー。

不味いことにこれらの食材は中毒性がある。三食こんな生活をしていれば、肥満や、病気は当たり前だろう。

筆者が若いころはこれらのジャンクフードなどはなかったから、肥満児はほとんどいなかった。高カロリーの食事を控えればある程度防ぐことのできる疾患であると思う。生まれながらにしてこの病を持っている人もいてそれは気の毒に思う。

〔近況〕

「常陸旧地考」はようやく完成。印刷製本にかかっている。この連載も私家版としてそろそろまとめるつもり。他に3，4本の小説を書きつづけている。これはモノになるかどうかわからない。

次々と調べることが出てくるので図書館通いが欠かせない。

こういったところで、「風の会」に参加する以前と比べたら、数倍の忙しさである。

楽しみながらやっているので、ちっとも苦痛ではない。考えてみたらひどく贅沢な毎日を送っているともいえる。おかげで、出会えることのなかった人たちとも出会うこともできた。活字になっていない分を含めると、原稿用紙にしたら数百枚かひょっとすると千枚を超えているかもしれない量の文章を書いてしまった。子供の頃は5枚ほどの文章を書くのも四苦八苦していたというのに。

定期的にある程度の枚数の文章を書きつづけるというのはいいトレーニングになっていると思う。締切があるというのもいいことだ。

こうしてっ書いていても時にはリズムに乗ってすらすらと書けてしまうこともある。

〔最年少棋聖誕生〕

将棋の世界で、藤井蒼汰7段がタイトルを獲得した。17歳と数カ月で7大タイトルの一つを獲得した。さらにもう一つのタイトルに挑んでいる。上り調子の勢いは、しばらくの間留まらないであろう。将棋は、コマの動かし方ぐらいしか知らない。ずっと以前に詰将棋を少しかじった程度である。古本屋で詰将棋の本を買ってきて、一冊やってみた。するとそれまで全く歯が立たなかった相手に勝つことができた。

囲碁も将棋も定石というものがあって、それをマスターすることが上達の早道の一つとなっている。

文章を書くことも、ある程度の基礎が必要とされる。やみくもに書いてみるのもひとつの方法であるとは思うけれども。

風と共に　《理》　大輪啓展

四　哲学（1）

中々開けない梅雨が続いています。未だコロナ禍ではありますが、天気にしても季節にしても、湿っぽいのは早くどうにかならないものでしょうか。

さて、今回からは哲学という事で、ふとした日常において様々な場面で感じる違和感について、共感していただける部分・或いは全く違うと言った事もあろうかと存じますが、今世にて感じる事象について考えようと思います。

先ずは、【絆】について、

皆さんも日々、幼い頃から、最近、道端で、家族、友人、知人、他人。

全世界おおよそ78億人とも言われる、その中の誰かと生活し、働き、支え合い、すれ違い、

四字熟語では、

合縁奇縁・以心伝心・旧雨今雨・挙案斉眉・竹馬之友・管鮑之交ｅｔｃ。

多種多様な言葉で表しています。

人は1人では生きていけない、なんて言葉を良く耳にしますが、全くその通りだと思います。

誰かと関わる事で思い悩む、そこから新たな発想を得たり、心の痛みを知り他の誰かに思いやりを持って接せられる様になったり、逆に怒ったり恨んだり悲しんだり、感情を育てると共に理性を学び、社会に適合出来るよう何らかの措置を講じています。

それでは、絆という観点から考えてみますと、良い行いをして称賛される人と、悪い行いをして非難される人とは何が違ったのでしょうか。勿論一概にこれと言ったものがあるのかは分かりませんが、非難される一つの考え方として、人との関わりが薄かったが故に、様々な感情が育たずに理性を保つ事も難しかったのではないか、それがきっかけで後悔せねばならぬ様な顛末となってしまったのではないか。

称賛される様な人間とは、感情豊かに生活出来る環境があって、親兄弟にも恵まれ、周りから羨まられるような状況だったのではないか。

そう言った事も要因の一つになり得るかと存じますが、私はそれだけとは思いません。

如何な環境にあったとして、その個たる人間が、根本的に善なのか悪なのか。

そこに尽きるのではないかと、日本の社会を否定する気はありませんが、犯罪に手を染める様になっては、改心するとは思えないのです。その一歩手前で止まれた筈なのに、運命を分けるその一歩を踏み出してしまった人と、踏み止まった人との間には、目に見えぬ程のとてつもない距離があるのだと思っています。

統計を取っている訳ではありませんので、その後真人間と呼ばれ世間に溶け込んでいる人も間違いなくいるのでしょう。ですが、限りなく低いのでは無いかと、そんな風に思えてならないのです。

ですが、私はこうも思っています。

どんな人間にも、必ず1人はその一歩を止められる誰かがいる、と。

そこで止まれたのなら、仮にその過程で何か間違いをしてしまっても戻れるのではないかと、その人が誰なのか、すでに出会っているのか、これからなのか、出会えるのか、人それぞれだと思いますが、きっといるんだと信じたい。

称賛を得ているからと言って、幸せだとも限りません。

その人のその立場、状況をトレースしてみないと、本当の意味では理解出来ないのかも知れません。

コンフィデンスマンという映画でもこんな事を言っていました、目に見えているものが真実とは限らない。まさにその通りなのではないでしょうか。

自分にとって理解し難い事は、自分にとって都合の良い様に変換してしまう。多くの人が、多様な状況でその様にしているのではないでしょうか。

この続きは、次月とさせて頂きます。内容は全て私の主観です。

【風の談話室】

《読者投稿》

やさと暮らし（42）　　さと女

時が飛ぶように過ぎてゆく、

・“風の会”の白井先生が亡くなって1年。今日は“風の会”の皆さんと先生のお墓参りをした。墓周りの草を抜きながら、先生が元気な時「暇になったら釣りでもしょう」なんて、夫に言っていたことなど思い出しながら、手をあわせた。

・「黄色い風　青い風　赤い風吹いた　夏が来た」11年前の6月、夫が入院した時に白井先生が書いてくれた色紙。今でも大切に飾ってあり、最近は願い事ばかりを、今日もコロナの終息と災害から我々を守って下さいとお願いをした。

・ログハウスの夕暮れ、ここは“楽市”社長のログテラス、風が通り抜け小鳥が歌い何とも心地よい。ついつい長居してしまう。先日社長の誕生日だったので、遅ればせながら好物の焼き鳥を持ってお祝いに。これからもたくさんのお鼻や、あ、間違い、お花で楽しませて下さい。

・日々コースが違う、本日の散歩コースは5・5キロ。このコースでは、必ず会う方が2人いて、いつも畑の土を這うように草取りをしている、そのため畑は奇麗なパッチワーク模様になっている。話しかけて見る、見慣れない作物なので聞いて見

ると、「これは薬草だよ。“さいこ”って言うんだ」「なんにでも効くらしいよ・・・」そういえばこの辺りは昔から薬草栽培農家が多かったらしい。

・久し振りに晴れ間が出たと思ったら、たまらない蒸し暑さ。朝のうちに伸び放題の草の始末をと頑張ったが、あまりの暑さに断念、午前中来客あり、午後も来客あり何となく夕方になり、恒例の散歩。今日は、歩いたことのない所、道があるようでないような、蛇さんが現れそうなところ。藪を抜けると、手入れの行き届いた畑、大好きなネギ畑と、トウモロコシの牧草地。こんな所に畑があるとは思わなかった。因みに今日は６キロ程も歩いた。

・今日の散歩コースは６・５キロ、小雨の合間をぬって山道を歩く・・・すると、山百合が咲き始めていた。歩きならではの出会いです。いい香りを味わった！

・車を走らせていた時、チラッと目に入った黄色の絨毯。今日は其処の黄色を目指して歩く、到着すると其処には一面のひまわり畑、道路からは見えない。そして残念ながら、ひまわりは全部後向き・・・。折角なので、前からも見たく周りを歩くも、すっぽりと藪の中だった。そして、今日の散歩コースは軽く５キロ。

・買い物に付き合って貰った夫が、スーパーでウナギの蒲焼をじっと眺めている・・・。食べたいの、と聞くと、食べようかと言う。実はウナギを此処８年くらい食べていない？８年前の土用の丑の日、お店に予約をしていた夫が夕方仕事を終え、オートバイを飛ばして帰ってきた。その時です・・・家の前で伸び切った草にタイヤを取られ転倒（めったにバイクで行かないのにその日はバイクだった）。暫く起き上がらない、ヤッと起き上がった時の悲痛な顔。夕方診療している病院でレントゲンをとり、別の脳外科に行きＣＴを撮る。散々な目にあった結果は、脳は異常なしだったが鎖骨骨折。そんなことがあってからウナギを見たりするとフラッシュバックとなり避けていた。今夜食べてみて、やっぱり美味しい。これでウナギ解禁かも・・・。

梅雨の晴れ間に　　燕石山人

〔相変わらずのコロナ話〕

とうとうこの石岡でも感染者が発生した。というよりようやく見つかったかという思いである。複数の感染者がいてもおかしくない。感染の広まっているところとの往来が、自粛が解禁された今となっては、頻繁に行われ、ひところ広まったマスクの着用も、減っている。

コンビニエンスストアの若い女性従業員だという噂も聞くが、市当局からは詳細は公表されていない。

ようやく石岡も大都市の仲間入りか、と喜んでもいられまい。

感染者が、あたかも悪いかのような話も出ているが、ここまで広めてしまったのは、為政者たちの責任であり、もはや人災と言える。

新型コロナの感染状況は、都市部を中心に再び増加傾向に推移している。

７月１８日の時点で、東京、神奈川、埼玉、千葉、大作など大都市圏では、再び多くの感染者が見つかっている。

東京では、短期間に千人を超えて、収容施設が間に合わなくなってしまった。

ブラジルでは強権的な大統領の下、感染者は２００万人を突破している。世界中では１００００万人を突破している。

予想されていたことだけれども、ここにきて再び緊急事態宣言は出さないという。

責任を担わなければならない人々が、あいかわらず具体的な数値も示さず、観念的な文言を発しているだけである。

あえて言えば、経済活動の停滞がこれ以上続けば間違いなく不況に突入する。経済の面で良い材料は全くない。ＧＤＰは下がる一方。他国もどこも軒並みマイナスとなる。そんな中でこれといった経済対策も打たれない。活路の見いだせない不況のトンネルの中を行くしかない。

かじ取りをするメンバーが、コロナに追われて右往左往しているだけではとても頼りにならない。

豪雨による西日本の災害が起きて、これから台風シーズンを迎えて、また新たな被害が発生する。そこにまた、地震などの天災が加われば、まさにお手上げである。

ロシアは憲法を改正してプーチンの続投が可能となった。中国は習近平体制の一層の強化を図り、法律を強化して香港のデモを抑え込もうとしている。北朝鮮国内の動きも、何やらきな臭い。

高い支持率を誇った韓国のムンジェイン政権も、支持率が落ちてきている。政権を担う側にとってもコロナは厄介な敵である。

ニュースではときおりオリンピック関連の話題が流される。いまだそんなこと言っているのかという感想しか出てこない。

〔景気はどうなる〕

どうやら年金運用で、１兆円を上回る大赤字を出したようだ。

東京オリンピックの開催はほぼ不可能である。見込んでいた観光収入は、激減した。国内旅行客の増加も、回復することは見込めない。

政府は、経済界に尻を叩かれて、ＧｏＴｏキャンペーンとかと言い出して、１・７兆円の予算をつけて、国内旅行を活性化・促進しようとしているが、お役人の書いたプランなぞ効果は薄いだろうよ。

コロナ騒ぎで、多くの人が旅行を自粛していたが、解除になったからと言ってすぐさま国内旅行に行くわけがなかろう。

楽しみにしていた修学旅行が、やる必要のなかった自粛の強制によってすべて中止となった。今になって慌てて旅行に行けと言われてもこの状況になってからでは、さらなる感染拡大となるのは目に見えている。

新たに選挙権を持った高校生たちは、その怒りの矛先を投票によって突きつけるべきだ。

旅館業組合からでも突き上げられて、こうした対策を打ち出したのだろう。旅客運送業。鉄道、バス、航空、こうした業界も、利用者の激減に苦しんでいる。観光地の土産物店も、売り上げ激減だろう。ホテル旅館に食材を提供しているところも大打撃だろう。

これらの業界を助けようというのだけれど、じゃあこれ以外の職種は被害をこうむらなかったのだろうか？

以前に書いた虚業と実業のこと。観光は、其所の景色を消費し、食物を消費するだけの虚業である。何一つ生産しない。場合によっては自然破壊をしている。

思い起こせば、感染流行の発端は、旅行客ではなかったのか。

航空産業は倒産と再編縮小が相次いでいる。オリンピックの外国客も望めない。景気のＶ字回復などはどうかんがえても望めない。

それこそ、カジノ需要にでも頼るしかない情けない状態になっている。

例の三本の矢はどうなったのだろう。１０万円受け取っておいて文句は言いたくないが、アベノマスクだけじゃ困るよ。

もう２、３回十万円給付をすれば、景気回復につながるかもしれない。

〔ツイッター〕

６月から、スマートホンを使いだして、ツイッターを始めた。同時に、フェイスブックもやりだした。

インターネット上では、様々な情報が飛び交い、中には明らかな出鱈目と分かるものもあるが、困ったことに、どちらとも判別できないものも数多くある。

一部では、根拠もなく個人や団体を名指しで攻撃する集団や個人が跋扈している。管理者側がそれをネット上から削除し、再度投稿できないようにブロックすべきなのだが、こうした動きはいかにも鈍い。ヘイトスピーチにしても、野放しと言ってよい。

こうした連中は、匿名性をいいことに、やりたい放題である。規制をする動きもあり法制化したようだが、例によってザル法で、これらの者たちを根絶するには程遠い。

コロナ対策として、スマートホンの位置情報を、一元化して、個人がいつ他人と接触したかを捉え、濃厚接触者を把握して隔離することにより、感染の拡大を抑えるという。

スマートホンの普及率が多くなっているとはいえ、まだまだ全員にいきわたっているわけではない。特に高齢者は使いこなすのは困難である。

個人の行動を他人に把握されたくない人も多くいるだろう。このプランは、少なくとも全国民の８割以上が加わらなければ成り立たない。

私が知る限り、一つの疾病でこれだけ長く騒ぎが続いたことはない。

近代に入って、幾度か全国的な疫病の流行があったけれども、いずれも半年足らずで終息に向かった。今回の新型コロナの流行が、こののちも続くと、初めてのケースとなるわけです。

様々な対策が議論されているけれども、今のと

ころ有効な手段は見えてこない。
歴史的に見ても史上初のことになる可能性がある。長いこと平穏な暮らしが続いたけれどここへきて、東日本大震災、それに伴う原発災害、毎年のように繰り返される、台風などによる水害．それに追い打ちをかけるような地震発生。
国中何処をとっても安全なところがなくなってしまった。
都市部を中心に殺人・強盗が頻発している。些細なことで人を、家族を殺してしまう。
安全神話は、いったいどこへ行ってしまったのだろう。

〔余話として〕

父の残した書付の中から、古い走り書きのようなものが出てきた。
太平洋戦争中に、北端の通信隊の責任者でもあったので、海軍軍令部への出張報告で、任地を離れているとき、留守部隊は空襲を受け、多くが犠牲となった。
その時の一人の下士官が残した遺品の中の書付を書き写して、父が保存したようだ。
内容は、軍事機密に触れるものもあり、ほとんどが暗号化されているため、父のようなものでなければ解読は不可能だったろう。多くは、若いころに中国戦線に従軍した時の思い出を語ったものである。
人に見せるために書かれたものではないので、飾らない文章でつづられている。父より一回り以上年上の、ベテラン下士官であった。
殆んどの関係者は物故されているはずだが、少しは生きている人もおられようし、子供やお孫さんもおられよう。今さら尋ねようもないし、一人一人に承諾を貰うすべもない。
今更の観もあるけれども、かつての戦争の時代の一つのエピソードとして、次号から紹介しようと考えている。
そのまま書いて都合の悪い所は、伏字にした。今の人にも判るように、注釈やフリガナもつけた。現代仮名遣いに改め、漢字もなるべく今のものに変更した。まるで暗号書を解くような、結構困難な作業であった。まだ前文の解読は終わっていないが、半ばほどは進んでいる。
最前線の兵士の肉声が、少しでも伝わればいいとも考えた。
父のことについて、かなり多くのことを語ってきたが、今回の発見は特筆すべきものがあると思い、資料を調べながら、幾度かにわたって書いてみよう。

茨城県の難読地名とその由来（5）

木村進

子生　【こなじ】　鉾田市

この子生で【こなじ】と読ませるわけですが、全国を見ても同じ読みの地名は見つからない。
★　子生　が付く地名としては、
茨城県つくば市手子生（てごまる）
茨城県鉾田市子生（こなじ）
福井県大飯郡高浜町子生（こび）
愛知県稲沢市子生和町（こうわちょう）
福岡県八女市黒木町鹿子生（かこう）
などがある。「手子生」はすでに述べた。他は子生を「コウ」「コビ」などと読ませている。
角川の地名辞典には地名の由来は触れられていない。まあわかる資料がないということだと思う。
「難読地名を行く-茨城編」（産経ニュース）によれば、地元の「厳島神社」の氏子の話として、伝聞だが、
「当地には厳島神社「本殿」があり、「子生の弁天様」として親しまれている。
こちらの神社の氏子総代会長の話では「地名が決まる前から神社があり、安産の神様として親しまれていたから、子生という地名になったのだと思う」とのこと。
「こなじ」と読む由来としては「昔、年配の氏子から『子を生（な）す』がなまって『こなす』から『こなじ』に変化したと聞いた」とのこと。」
しかしこれは少し根拠に乏しい。なぜなら子生の厳島神社は確かにかなりの古社ではあるが、創建は、鉾田市観光協会のHPには1265年に市杵島姫命（いちきしまひめのみこと）を祭神とし、安芸の厳島神社より分霊を迎えたと古老の口伝えがあります。となっている。
すなわちはっきりしたものではなく口伝で伝えられてきたことで、1265年というのが伝承ではあるが、現在の公式な見解なのでしょう。
しかし、この「子生（こなじ）」という地名はもっと前からあるように思われます。
常陸国国府のあった石岡には常陸国分寺があって、そこに伝わる有名な国分寺の鐘伝説があります。
それによると、
奈良時代に聖武天皇の命令で国府に建てられた国

分寺。七重塔も建ち、立派な伽藍が建てられました。その時、この「子生（こなじ）」の浦に２つの大きな釣鐘が浮かんだのです。
それを手押し車にのせて、何日もかけて国府の国分寺に運びました。
現在でもこの時に鐘が通過した場所に「七日ケ原」「車作」「八日ケ堤」の地名が残り、また車軸が、鐘の重さに耐え兼ねて折れた所には、「こみ折れ橋」等の名前が付けられて残されているとなっています。
子生（こなじ）は常陸国府（石岡）から見ると太陽が登る東の方角にある鹿島灘沿岸の村です。筑波四面薬師の一つと言われる菖蒲沢薬師堂の薬師観音像はこの子生から空を飛んできたとの言い伝えもあります。
子生の厳島神社は少し内陸に入ったところで、これらの伝説の子生は海岸に面した浜です。

こんなことを考えて、前述の由来と違った他の考え方ができないかを勝手に考えてみよう。

（１）　子生は常陸国府と密接なつながりがあり、「国府」→「こう」→「子生」と変化（国府とはかけないので）、この当て字の読みが「こなす」→「こなじ」となった。
（２）　つくばにある「手子生（てごまる）」と同じように「手子后（てごさき）」神社の祭神「手子比売命」（手子は女子の愛称で、手児などという地名も多い）などの神がまつられ、手子生　→　子生　などとなった。
どれもあまりはっきりとしないが、上記２つの案もありそうな気がする。

生子【おいご】　坂東市（旧猿島町）

「生子（おいご）」は、谷戸（やと）が入り込んだ位置にあり、利根川と鬼怒川の間を流れる「西仁連川（にしにづれがわ）」の右岸にあります。縄文・弥生・古墳時代の遺跡が点在している地域です。
地名としての「生子村」は江戸初期の１６１２年の書にすでに見られ、１８世紀初期の享保年間に東側に「生子新田（おいごしんでん）」が開拓されています。

「生」の字を「オイ」と読むのは「相生（あいおい）」などでも使われているので、それほど難しい読み方ではないかもしれません。「相生」の地名はほとんどの場合に、２つのものが合わさる（川の合流、村の合併など）所につけられることが多いようです。
このオイ＝生についてはアイヌ語説が当てはまるかもしれません。
北海道に「若生＝わっかおい」という地名があります。このワッカ＝水で、オイ＝場所の意味と言われています。
ですから「生＝オイ」は場所を表す言葉、または何かが生まれるところという意味と解釈できそうです。
しかし、「子＝ご＝こ」はどんな意味があるのでしょうか。
現在は子供などに使われますが、古代は人のことをコと呼ぶことが多いようです。
卑弥呼のコなども子供ではないです。
鹿嶋市にある「子生（こなじ）」があり前に紹介しましたが、こちらは字を逆さにした「生子」と書いて「おいご」ですから、地名もなかなか読めないものが多いですね。

★生子　のつく地名

・茨城県坂東市生子（おいご）
・生子新田（おいごしんでん）
・福井県大野市下若生子（ししもわかご）
・兵庫県南あわじ市賀集生子（かしゅうせいご）
・奈良県五條市生子町（おぶすちょう）

また栃木県鹿沼市に生子神社（いきこじんじゃ）という神社があり、９月に行われる幼児の泣き相撲が有名です。こちらの名前の由来は、当初は籾山明神と言っていたが、天文18年（1549年）に、氏子の一子が痘瘡により死去し、嘆き悲しんだ夫妻が明神に我が子の蘇生を祈願した後、境内に湧くミタラセの池で水行を行ったところ、３日後に願いが叶い子供が蘇生したという言い伝えがあります。
これ以来神社の名前が「生子（いきこ）神社」と呼ばれるようになったと伝えられています。

大歩【わご】　猿島郡境町

この「大歩」と書いて「わご」と読む地名は全国の地名を調べてみましたが、他には見つかりませんでした。
産経ニュース「難読地名を行く-茨城編」の中で、境町歴史民俗資料館の初代館長、椎名仁氏の著書

「境町の歴史散歩」の内容が紹介されています。これによると

「アイヌ語の『湿地』を意味する地名だともいわれています」

とあり、「わご」はアイヌ語で「湿地」を意味しており、土地柄から名付けられたのではないかという説が紹介されています。また、その中に、「永禄10年（１５６７）の文書に『泉田郷の内宇和後』、元和６年（１６２０）の文書に『泉田の内うわこ村』とあります」

と書かれており、この大歩（わご）地区の南に、現在も「西泉田」という大字があるため、この「内宇和後」（うちうわこ）が「わご」に変化したものではないかと書かれていました。

でも「大歩」という漢字が当てられた理由はどこにもありません。また、意味が判らない地名の多くが、「アイヌ語」「古アイヌ語」「縄文語」ではないかともいわれ、それで何となく納得させられてしまうのですが、ここに書かれている話はあまり説得力がありません。

ここの説明でわかることは、「わご」または「わこ」と呼ばれる地名が江戸時代の前からあり、昔は「和後」と漢字で書かれていたということです。

「わご」そのものに「湿地」という意味がアイヌ語にあるかというとはっきりしません。湿地を意味する言葉として使われている「アイヌ語」を調べてみると、「トマム」「ニタツ」「サル」などがあり、北海道にこの語がもとになったという地名がたくさんあります。しかし「わご」などのことばは見つかりません。

では、この「大歩（わご）」のあたりを地図で調べると、この場所は「関宿（せきやど）」という、江戸時代の水運の一大基地であった場所の少し東側です。この地で利根川は荒川と分かれます。でもこれは徳川家康から3代に亘っての大工事であった「利根川東遷」事業によるものです。この事業の前の地形はどのようになっていたのでしょうか？

家康は東京湾に注いでいた利根川を、このあたりで銚子の方に流れていた常陸川につなぎ変えるために「赤堀川（あかほりがわ）」を掘削して利根川の一部にしました。

確かに昔の地形を想像すると「湿地」であったのかもしれません。

でもアイヌ語というよりは、「輪（わ）河（ご）」、「和（わ）河（ご）」として、河（川）の曲がっている場所、または河が合流している場所などにつけられたのではなかと思われます。

全国の地名で「わご」「わこ」などの付く場所を探してみると、たくさん「和合」「和郷」（わごう）という地名が見つかりました。

・秋田県大仙市　和合
・山形県山形市、朝日町　和合
・新潟県新潟市　和合
・富山県上市町　和合
・長野県阿南町　和合
・岐阜県大垣市、瑞浪市、　和合
・各務原市　蘇原　和合町
・静岡県浜松市　和合
・愛知県東郷町　和合

その他、「和郷（わごう）」という地名も広島県と長崎県にあります。

この「和合」という地名もおそらく　河の曲がっているところや、川が合流したりする場所に多くつけられていた名前のようです。しかし、「和合」という漢字の持つ魅力で、いつの間にかこの字（和合）が充てられたのかもしれません。

ところで埼玉県の和光市の名前は、市になる前は「大和町」でしたが、神奈川県にすでに「大和市」があったために、公募でつけられた名前です。しかし、和光市は新羅の人たちが開墾した土地で「新座」「志木」などは「新羅」（しらぎ）が関係している地名のようです。

さて、では「大歩」という漢字が何故この地に充てられたのでしょうか。

前に述べたように、豊臣秀吉の「安土桃山時代」から家康の「江戸時代」頃には「内宇和後」「内うわこ村」などと記載されていたといいます。

これについては何も資料がないので、大胆な推測をしてみましょう。

豊臣秀吉が行った太閤検地で全国の田畑の測量がなされました。

この時に、田んぼの大きさによく使われる面積である「１反（たん）」が、それまで360歩（ぶ）であったのを300歩（部）に変更しました。今でいえば1歩は約1坪です。畳でいえば2畳ですね。ですから1反は300坪　（約1000m2）です。

しかし、これ以外に1反の2/3、1/2、1/3という単位が存在していました。

これを「大歩」「半歩」「小歩」と書き、特に関東では良く使われていたようです。

これによれば「大歩」は約200坪の面積となります。

太閤検地後のこのあたりの田んぼが「大歩」すなわち、約200坪単位で区切られていたなどということはなかったのでしょうか？これは単なる想像にしかすぎませんが、地名を考える時に一つの参考にはなるかもしれません。

ところでこの堺町は「猿島郡」にあるのですが、この地も他所の地域の人は読めないようです。「猿島＝さしま」と読みます。

常陸旧地考

菊地孝夫

○新治郡

風土記に、新治郡、東は那珂郡で境は大きい山。南は白壁郡。西は毛野河。北は下野と常陸の二國の境で即ち波太岡、云々と云う。

古老の言うのには、

「昔、美麻貴天皇の御世、東夷の荒族〔俗に言う荒ぶるやし者〕討ち平らげる為に、新治國造の祖を遣わした。名は比奈良珠命という。この人罷り至って新しい井戸を掘る。〔いまの新治の里にあり祭りを執り行う〕その水は清く流れ、井を掘るを以て名となす。郡号に表してそれより今に至るもその名を改めず。」という。

〔処の伝えには、遠く（昔）より新治國というと〕云々

國造本紀に、親治國造は、志賀高穴穂朝の御世に、呉都呂岐命の児の、比奈良布命を国造に定めたまわる〔親は新の誤りなり〕和名鈔に新治郡新治郷あり。

いま考察するに、新治郡三村の枝郷に新治村が在って、これなり。この三村というのは、即ち新治郷にて新治の名は今の新治村の片隅に残り、元の方は三村となった。府中の茨城などに同じ。この類いは〔全国の〕国々に多い。この里の名により郡の名にもなった。これまた国々に多い。

さて國誌に筑波郡三村郷の条に、今属す新治郡と言うのは誤りなり。この村は志筑川にかかわる地にて、全く新治郡なり。これを筑波郡三村郷とするときは、新治郡とは二つに離れているので必然ではない。これはいにしえの新治郷なること疑いなし。さて新は物の始元をいい、治は墾にて「新撰字鏡」に耕田用力なりと有り、また字書にも耕なり治なりともあり、田畑であれ道路であれ（そこに）あった小さな土地を切り開いて作ることをいう。

萬葉集十巻には

住吉の岸を田にはり蒔きし稲の

〔拾遺集に、住吉の岸を田に掘り蒔きし稲のとある〕

十二巻に、新治今造る路、云々。

十四巻に信濃道はいまのはりみち、云々などあり、これを思うべきだろう。

この國井（くすじ）まではこの所、早くに開墾した故の名である。

風土記の説のごとく、井を治（はり）しゆえではなくて、田畑道路など総てを墾（は）りし故の名である。

日本紀の景行紀四十年の条に、蝦夷を既に平らげ、日高見國より帰り給いて、この西南、常陸をへて甲斐國に至り、ここ酒折宮に居た時、燭を挙げて食を進め、この夜歌で以て侍者に問い給いて曰く、

「新治筑波を過ぎて　幾夜か寝つる」

諸々の侍者が答えられなかったとき、燭を掲げる者が、王歌の末に続けて、

「かがなべて　夜にはここの夜　日にはとおかを云々」

と詠った。

新治と筑波は地名を並べあげたのであって、のちの時代の歌にある「新毬の筑波」とかかる枕詞ではない。

新治という地名は和名鈔に、河内國若江郡新治郷あり。

また、續紀の「稱徳紀」に、天平神護元年（765）十月乙酉、和泉國日根郡新治行宮に居たり、云々など見えたり。

また日本紀、「顕崇紀」に室壽の詞に、出雲は新墾、これ新墾の十握稲の穂、云々とも見える。

續紀：続日本紀
毛野河：鬼怒川。絹川ともいう
美麻貴天皇：崇神天皇（記紀伝承、第十代）
呉都呂岐命：くとろきのみこと
比奈良布命：ひならふのみこと

○真壁郡

風土記に白壁郡、東は筑波郡、南は毛野河、西北は新治郡と有る。これ真壁郡なり。
和名鈔に真壁郡真壁郷あり、郷名をもとにて郡名にもなりしなり。
いま考察するに、真壁は風土記に白壁とあるのは元の名で、その白壁は、清寧天皇の御名代を置かれし地にて、白髪部郷なり。
日本紀清寧紀、二年春二月、天皇、子の無いのを残念に思い、大伴の室屋大連を諸国に遣わし、白髪部舎人、白髪部膳夫、白髪部靭負を置き給い、御名をのちの世に残さむと云々。とある。この白髪部の人共の住みし地にて、白髪部郷なるべし。
さてこの御名代という事を、孝徳天皇の御世に止められしのちも、その部の人共の住みし地、それと地名になって、後までもそうと呼ぶようになった。この白髪部を、白壁と二字に改めたものなり。
續紀元明紀、和銅六年（７１３）の詔に、畿内の七道、諸國郡郷名には「善き字を付けよ、云々」とある。つぶさに山川原郡、名号のよしを記さしむ、云々とある。
また延喜式の民部式に、およそ諸國部内郡里などの名はなべて二字を用い、必ず、善き名を採り云々、と見える。この詔により、白壁と改めたものなるべし。
それをまた、續紀桓武紀には延暦四年（７８５）五月の詔に曰く、臣子の礼は必ず君の忌み名を避けるべし。このころ、先帝の御名、又朕の忌み名、公私、犯触なお聞くに忍びず。今より以後なべて改め避けて、宜しく、ここに於いて姓の白髪部を改め、真髪部となす、山部を山と為す云々、と見えたり。この時真髪部の例により、白壁を真壁と改めたり。
ここに先帝というのは、桓武天皇の大御父、光仁天皇なり。名を白壁と言い奉る。白壁と白髪部と音通う故避けしなり。山部は桓武天皇の大御名なり。
真壁という地名は和名鈔に、上野國勢多郡、下野國河内郡、芳賀郡、駿河國有度郡、備中國窪屋郡、などにともに真壁郡有。これいにしえの、御名代の地なるべし。

諱：忌み名。中国朝鮮王朝で広く行われた制度。皇帝・王と同じ名前を付けることを禁じた。
＊名前には呪術的な力があり、呪法によって暗殺されることを恐れたものでもある。
清寧天皇：記紀第二十二代　名は白壁
桓武天皇：第五十代在位７８１～８０６　７３７～８０６
光仁天皇：第四十九代（在位７７０～７８１）７０９～７８１

○筑波郡

風土記に筑波郡、東は茨城郡、南は河内郡、西は毛野河、北は筑波岳云々。
古老曰く、
「筑波縣、紀之國と謂う。美萬貴天皇の御世、采女臣友柄筑簟命、紀国造として、遣わされしとき、國に自身の名をつけられ、後世に伝えたいと欲して、即ち本号を改める。更に筑波というのは、云々。
國造本記に、筑波の國造は、志賀高穴穂朝の御世に、忍凝見命の孫、阿閉色命を、国造に定め奉る云々。
和名鈔に筑波郡筑波郷あり、今の筑波村これなり。
いま按ずるに、今の筑波村のみにあらず。神郡六所などにかけて、このあたり広く筑波郷にてありしなり。
筑波の名は、僅かに今の筑波村に残りたるものなり。
筑簟命：つくばのみこと
忍凝見命：おしこみのみこと
阿閉色命：あべいのみこと

○河内郡

和名鈔に河内郡河内郷あり、
國誌に云う河内郡、東は箕幡大江に至り限りとなす。北は信太郡と接す、西は筑波新治などの郡と、あい混じり、南は下総国界に至る云々。
常陸下総の境の下利根川の湖岸なれば、河内の意なり。
里人は是をカハチ、またカワチ等と唱えるは、訛りなり。
カハウチの、ハウの約フなれば、カフチというべし。
和名鈔の仮字、甲知とあるは、カフに甲の音を借りて書けるなり。畿内の河内国の假字、加不知とあるによるべし。

さて讃岐國越隠地郡の郷名、河内を和名鈔に加無知とあるは、國ことばか又は、無は不の誤字であろう。
風土記、那珂郡条に、郡より東北粟河を挟み、驛家を置く〔本近く粟河河内という驛家、今もとの名に従う〕云々。河内と言える地名はどこもこの意なり。
また河内國河内郡、下野國河内郡、播磨國加茂郡川内郷、美作國大庭郡河内、安芸國安芸郡河内郷、三河國阿碧海郡河内郷、肥後國飽田郡川内郷、などあり。
國誌：常陸國誌

○信太郡

和名鈔に信太郡信太郷あり、今なお郡中に信太村在りこれなり。
風土記に信太郡東は信太流海、南は榎浦流海、西は毛野河、北は河内郡云々。
釈日本紀にいいたる風土記信太郡、云々。
古老曰く、
「御宇難波長柄豊前大朝天皇之世、癸丑の年、小乙上物部河内、大乙上物部会津惣領高向太夫、など筑波茨城郡七百戸を分けて、信太郡を置く。この地は今日、高見國、云々。」
万葉集注釈には、風土記に黒坂の命、陸奥蝦夷を撃つ。こと終わり凱旋す。多珂郡角枯山に及び、黒坂の命、病にかかり、ここに物故す。角枯改め、黒前山、と名づく。黒坂の命の輸需車は黒前山より発して、日高之國に到り、葬具の儀。万葉集には赤旗、青旗、幟、入雑じり、飄颺雲の如く、飛虹の如く張り、野明るく、道に輝く。(當)時の人、これ幡垂(はたして)乃國という。後世こと変わり信太國という云々。垂をシテと読むはシダレを約したるなり。
日本紀、皇極紀に、とる枝葉折、欠けるはた木綿、云々。
万葉集に、木綿取りしでて、云々。又、いわいべに木綿取りして、云々。
採物歌に、さかき場に木綿取りして、云々
拾遺集に、石上振るや壮士の太刀もがな
　　くみのおしでしみやじかよはむ
などとあって、垂にて物の滴ることなり、俗にしだれるというのはこれなり。さてかの赤旗、青旗の風に靡き垂れたるをもって、幡垂の國と名付けたのを、のちの音便に信太といえるよしなり。
信太といえる地名は和名鈔に、陸奥國信太郡信太郷、玉造郡信太郷、駿河國信太郡などあり。
さて、また和泉國和泉郡信太郷、これは仮字。臣多とあり、信太とはべつなり。
シムの音をシノに用いたるにて、シノタなり。のちの歌に、シノタの森と読めるこれなり。
流海：古代霞ヶ浦（内海）はその場所ごとに、地名を冠して流海（ながれうみ）と呼ばれた。
輸需車：霊柩車

○茨城(うばらき)郡

風土記に茨城郡、東は鹿嶋郡、南は佐礼流海、西は筑波山、北は那珂郡云々。
國造本紀に、茨城郡の国造は、輕島豊明朝の御世、天津彦根命の孫、筑紫刀禰を国造に定め賜る、云々。
神代紀に天津彦根命はこの茨城國造、額田部連等の遠祖なり、云々。
和名鈔に茨城郡茨城郷あり、今の本の仮字牟波良岐とある。牟は宇の誤り也、ウバラキと読むべし。
この茨城郷は今の府中の村なり。このことは郷の条にて詳しくいう。
風土記に、古老曰く、昔、國栖有り〔俗につちくも、又やつかはきという〕山の佐伯、野の佐伯、土穴を掘り常に穴にいる。人の来たる有れば即ち穴に入って隠れる。その人去れば更に丘に出て、遊ぶ。狼性梟情、穴に窺い、掠め取り、招くに応ぜず、風俗を阻み、この時大臣族黒坂の命、（つちくもが）出て遊ぶ時をうかがい、茨棘を穴の内に施し、即、騎兵を進め急追す。佐伯等は常のごとく、土窟に帰った。蓋し、茨棘繁り、突き破られて死す。故に、茨棘を取り、以て縣名に著す。
（所謂茨城は、今那賀郡の西にある）
或いは、曰く、山之佐伯、野之佐伯、賊の長は為すは、衆徒を率いて國中横行し大いに劫略為した時に、黒坂命、謀りてこの賊を滅ぼす。茨を以て城を造る、故に地名を茨城と謂う、云々。
今按ずるに風土記の説はどうか。
茨の生い茂りたるゆえの名と聞いている。
さて城とは、何であれ周回に限りが有って、一區に構えたる所を言う名にて、いまの世に志呂というにこの字書くも同じ意なり。
また幾は、古く、志呂はあとのごとく思うけれど、必然にてあらず。互いに通はし用いたると見える。
幾と言えるは、下総の結城、陸奥の岩城、美濃の苗木〔木は仮字にて苗城なり〕山城の葛城。
志呂といえるは、山城、信濃の松代、備前の小城、甲斐の八代、尾張の贄代、伊勢の漕代などあり。
なおあるべし。

さて城の字は、幾にも志呂にも用い，代の字と志呂にのみもち得て、幾に用いたることなし。
綏靖天皇、孝照天皇、孝安天皇などの都を葛城といえるも、葛の一區、なるより名付けたる地名なり。いまの世に網代、苗代、茄子代などという。
和名鈔に那賀郡茨城郷、また伊豆国田方郡茨城郷、下総国匝瑳郡茨城郷など在り。

国栖：くず
つちくも：土雲、土蜘蛛。土着の人々に対する蔑称。
やつかはぎ：八束脛、足の長い者の事
天津彦根命：あまつひこねのみこと
黒坂の命：くろさかのみこと、不詳
佐伯：さえき。遮ることから即ち、大和朝廷軍へ抵抗した者たちの事を言うとか。
ただ、貴族たちの中には佐伯氏の姓があるので、この件は再考すべきか。

【特別企画】

打田昇三の将門記　「罪と名声」（六−二）完

○将門の最期

　此の章段の書き出しは「時に新皇は順風を得て」であるが、表題が「将門の最期」なので、順風も逆風も関係なく気の毒な結果は見えている。此の季節の順風は西風か北風で有ろう。始めは敵側の平貞盛と藤原秀郷らがツイテいなくて強風のなか、風下で戦うことになったのである。
　暴風並みの風が樹木の枝を揺らし、地を揺るがす轟音と共に砂塵が大粒の砂利まで吹き飛ばすほどの勢いで迫ってくる。是により将門軍の兵士が構えた楯は前に倒れるが、攻撃軍は自分が構えた楯に押し倒されることになる。そこで両軍ともに楯を放棄して戦う白兵戦を展開した。
　其れを機に貞盛軍の中陣から奇襲攻撃を掛けてきたので、将門軍の騎馬武者が強風下で迎撃し、其の場で八十余の敵を討ち取った上に果敢な攻撃を続けた。臨時職員が多かった攻撃軍は此の事態にショックを受けて二千九百人ほど居た兵の多くが逃げ去り、僅か三百余の正規社員だけが戦場に留まるだけになった。其の三百余人も形勢の不利は分かるから、どうしよう？と思案している時に「風向きの変化」が起こったのである。是は平将門の運命を変え、大袈裟に言えば日本の歴史を変えた気象現象である。当時は気象庁が無かった。
　風向きが変わったことに気付いた将門は一旦、兵を退いて態勢を立て直すことを考えたと思うが敵側も逆に絶好の機会を得たことを知り、攻撃の手を緩めずに攻め立てたので大激戦となったのである。両軍が激突する中で鎧兜に身を固めた新皇こと平将門は、風下に身を置きながらも軍の先頭に立ち、騎乗した駿馬に鞭打って戦った。
　しかし強風下であるから、馬としては主人の思うとおりには動けず、馬上の武者も縦横無尽と言う訳にはいかない。原文には「…馬は風の如く飛ぶの歩みを忘れ、人は梨老が術を失えり…」とあるが、此の表現は「北山の決戦」でも使われた例で梨老とは古代中国の英雄・養由のことらしい。動きが鈍れば英雄豪傑も力を発揮できない。
　両軍激戦の最中に、原文では「天罰が下って」とあるが実際には何処からか強風に乗って飛んできた鏑矢が平将門の右の額に当たった。被害者？が将軍では無く兵士であれば「流れ矢に当って…」と書かれるところである。いずれにしても、新皇を称した平将門は誰が射たか分からない流れ矢に当って中国古代の伝説上の人物のように、呆気なく滅びてしまったのである。其れまでの歴史では将軍が自ら陣頭に立って戦い戦死した例は無い。其の様な事態を誰が想像出来たであろうか…
　また、最初の僅かな誤ちを糺さなかった為に、今回の大事（合戦の被害など）に至ろうとは誰が考え及んだであろうか…さらに武士の私的な勢力争いの挙句に、多くの人々が苦しみ、公益を害する結果になろうとは誰が気付いたであろうか…
　其の為に、漢書に言う中国の憂国の士・朱雲の様な人物に託して（暗に平貞盛と藤原秀郷を指している？）巨大な鯨のような賊の首を獲る…ということになったのであろうか…然し、漢書に依れば朱雲は悪人とされている。
　此の辺りの文には、其の作者が平将門の死により「承平・天慶の乱」が終わった安堵感と共に、一代の梟雄とも言うべき平将門の死に対して人には言えない惜別の情を抱いていた様な感がある。物語の主人公・平将門は討たれたが「将門記」は戦後処理の話が未だ続くので、今少し御辛抱を。

○将門悲傷

　賊として退治されてから「悲傷」と書かれても喜べないと思うが、著者をして其の様に書かせたのは平将門が単なる悪人では無かったと言うことかも知れない。兎に角、将門の敗死により、抑留

生活を送っていた常陸介（事実上の常陸国守）藤原維幾と、その着任を確かめる役の交替使（こうたいし＝文字を間違えると大変だが…）藤原定遠らは無事に解放され、二月十五日には勤務先の石岡に戻って来ることが出来た。

是は奇跡に近いことであり、譬えれば「鷹に狙われた雉が野原に残り、俎（まないた）の上の魚が海に帰れた…」様なものである。捕虜で有った昨日までは、不運な老人として辛い目に遭わされていたけれども、今は新たに出現した武将・平貞盛のお蔭で元の地位に戻れたのである。

一方で、新皇と呼ばれた平将門が地位も名声も生命さえも失い、身を滅ぼすことになったのは、武蔵権守・興世王とか常陸介・藤原玄茂とか碌でも無い連中の謀（はかりごと）に乗せられ騙された結果であり、誠に悲しいことである。

其の悲しみを例えて言えば、花を開き実を付けようとした穀物が途中で萎んで（しぼんで）しまい、光り輝こうとした月が雲に隠れてしまった様なものである。原文に「嘉禾（かか）の早く萎（しぼみ）」とあるのは、平将門の死が、二月十四日であり、季節では春に入っていたからである。

中国の古書・左伝（春秋左氏伝＝孔子が加筆したとされる魯（ろ）国の記録）には「悪徳を貪り（むさぼり）公権に背くことは、猛威を過信して無謀にも鋭利な刃物を踏む虎のようなものである…」と書いてある。別な書には「少人（此の場合は、思慮の無い人物）は自分の才能を十分に発揮することが出来ず、悪人は徳を得ても其れを維持することが難しい」とある。「深い思慮が無ければ身近な所にも心配事が起こる…と言われるのは、そういう事なのであろう。

其の様な観点から平将門という人物を見てみると、当時の政府に対しても功績が有ったと思われ忠誠心も認められるのに、生涯の行動が猛々しく粗暴な振る舞いが目立って、多くの歳月を合戦に過ごしていた様な有り様であった。その為に平素から学業には重きを置かず、武芸のみに熱中しており、其れが原因で親類縁者を敵として戦うことになった。その中に良からぬ仲間が増え、悪い評判が関東一円に広がっていった。結果的には其れが原因で、中国の古書に有る黄帝と炎帝の戦いで版泉の地（中国河北省）に滅んだ炎帝のように、合戦に敗れて命を失い、さらに謀叛人として永く汚名を残すことになってしまったのである。

○余類伏誅

小難しい標題であるが「よるいふくちゅう」と読む。平将門に関わった者たちが次々と殺害された―ということである。負けたから仕方が無いのだが合戦と言うのは、どれも「勝てば極楽、負ければ地獄」なのである。

原文に依れば「時に賊首の兄弟及び伴類等を追捕すべきの官符を、去ぬる正月十一日を以て東海東山両道の諸国に下さる…」とある。将門が負ける前から、其の兄弟とか親類縁者、仲間たちを懸賞金付きで討つように国家が命令を下していたのであるから、大日本帝国も碌なものでは無い。

追討の条件として敵の親分、つまり平将門を殺害した者には朱又は紫色の衣服を着用する位階が与えられるというのであるから凄い。時代により違いは有ったと思うが「朱」や「紫」の衣服は余程の高官でないと着用出来なかった時代である。其の様な条件で、先ず平将門追討の命令を受けたのは参議兼修理大夫、右衛門督（さんぎけんしゅりのだいふ、うえもんのかみ）藤原忠文である。長い官職名が付いているが、参議は正四位の職で中納言の次に位置する高官であるから通常の場合だと戦場に出ては来ないし、合戦も知らない。

副将軍には刑部大輔（ぎょうぶのたいふ）藤原忠舒（ふじわらのただのぶ）が充てられた。是も正五位の高官である。普段は宮中で威張っている二名の高級官僚の許に、そこそこの兵士が付けられて関東に派遣されるのであるが、兵士は近辺諸国からの徴発なので間に合わない。「将門追討」の看板をぶら下げた寄せ集め部隊が関東に到着する前に反乱軍の主な者たちは誅殺されたのである。

平将門の兄弟である平将頼と藤原玄茂らは相模国に逃れたが其処で殺害された。主犯格の興世王は上総国で誅され、武士階級では坂上遂高（さかのうえのかつたか）と藤原玄明らが常陸国で見つかって斬られた。

是に続き、征討軍の先手としてやって来た藤原忠舒が、下野少掾（しもつけのしょうじょう＝従七位）平公連（たいらのきみつら）を押領使（おうりょうし＝現地の豪族から選ばれる官憲）に任命して、四月八日から謀反人・平将門の一味を探索し始めた。是により各地に潜んでいた平将門の親族七、八人が髪を切り山伏になって山中深くに隠れ或いは妻子を捨てて逃れた。さらに残された者たちは探索を恐れて何処かへ去っていった。

そうした中で一月十一日に出された官符（将門軍の残党狩りを命じる公文書）は各地の隅々まで伝えられていったから段々と逃げ場がなくなって

いたけれども、二月十六日には天皇から命じられている詔使・藤原忠文が発する恩赦の布告を信じて自首する者も現れてきたのである。

○論功行賞

世の中の出来事は先ず善か悪かで分類されるから善の場合は褒賞が、悪の場合には懲罰が、それぞれにどの程度かで評価される。平将門のように国家と言うか、天皇を無視したような行為は無条件で最上位の犯罪に位置づけされるから、其れを解決した者も無条件に近い形で褒められた。

この事件に関与した者は、原本の記述に従って述べると「武蔵介源経基、常陸大掾平貞盛、下野押領使藤原秀郷ら」であるが、経基は武蔵国府高官の内輪揉めに驚いて都へ逃げて行き、有る事無い事を密告しただけなのに、論功行賞の筆頭に挙げられている。昔も今も高級官僚とその他の階層とでは何らかの形で差別が有るところが日本の素晴らしい伝統らしいから大事にしたい。

平将門の事件は、天慶三年三月九日に、中務省（なかつかさしょう）という現代の宮内庁の様な役所に申告がなされて其の軍功が認められ、次の様な論功行賞が行われたのである。

源経基―初めの報告（密告）は嘘で有ったが、後に其れが本当になったので正六位上から従五位下の位階に上げて貰った。嘘も大事である。

藤原秀郷―平貞盛が苦労しても果たせなかった平将門の討伐を実現させたので、其の軍略を賞して従四位下を与えられた。

平貞盛―将門と多年に亘り争っていたが秀郷と共に、遂に将門を討った功績で正五位に叙された。

○乱後の余塵

首謀者が討死し関係者が処刑され戦勝者が褒賞を受けたのであるから、此の事件は一件落着で世間から早々に忘れられるのが常であるが、どういう訳か平将門に関しては多くの人々の印象に刻み込まれたようで、特に都の人々は後々まで恐怖感が尾を曳いていたらしい。其のことは明治の文豪・幸田露伴も其の著書で触れている。此の章段に「乱後の余塵」が有るのも、平将門を単なる反逆者として済ませられない原作者の思い（当時の人たちを代表する感情）が有るのかも知れない。

本文に戻ると、平将門の行動を評すれば、誤まった考えから其の身分を越える野望を抱き、流れ行く水のように儚（はかな）い生涯を終えたのであるが、皮肉な言い方をすれば「虎は死んで皮を残し、人は死後に名を残す」という諺のように、自分の身は滅ぼしたが、敵として戦った者たちに思いがけ無い恩賞を得させたのであるから、気の毒ではあるが其の心中には悔いは無いであろう。

考えて見ると昔（紀元前一五四年頃）は中国大陸・前漢の時代に六国の王（楚、趙、済南など）の逆心により「戦国七雄の争乱」が起こったと言われるが、今（平安時代初期）は、一人の武人が謀反の心を抱いたことで坂東八か国に争乱が起きたのである。我が国では、此の様に皇位を窺うという出来事が古今に無く神代以来、その例を見ない…にもかかわらず平将門が其の禁を冒したことにより、其の妻子は路頭に迷い、身に危険が及んで「臍を噛む（ほぞをかむ）」ことも及ばぬ恥辱を受けるようになってしまった。一族の妻子兄弟姉妹らは、居所を失ったばかりか、身を隠し遁れる場所さえ無くしてしまったのである。

将門が勢威を誇っていた頃には雲の如くに群がっていた兵士や家族たちも敗戦と共に逃げ散ってしまい其の多くの者は途中で討たれてしまった。生き残った者も、親子兄弟夫婦家族が散り散りになって、或いは途中の山河に探し求め、或いは別れを惜しみながら、それぞれの方角に去ってゆくしか無かったのである。鳥では無いが「四鳥の別れ＝肉身との別離」を生じ、山では無いが「三荊の悲しみ（さんけいのかなしみ＝兄弟離反の戒め）」（いずれも中国の故事）を味わうように悲痛な別れをしたのである。

平将門の乱で、罪が有った者も無かった者も、同じ畦道（あぜみち）に薬草と雑草とが入り混じって生える様にそれぞれの苦労を強いられ、悪心を抱く者も清い心を持つ者も大河が清濁併せて流れるように、見境の無い悲惨な目に遭わされた。

大空の雷鳴は百里の遠方まで響き渡るが、平将門の悪名は更に遠く千里の果てまで知れ渡った。将門は常に大康（古代中国伝説の夏王、民政を疎かにして追放された）の真似をしていた為に宣王（周の名君）の様な正しい政治を行うことが出来ず遂に身を誤った。その挙句が天皇に対抗して帝位を窺うような行動を起こし其の罪により身を滅ぼし後の世に汚名を残すことになったのである。

○冥界消息

長々と続いた「将門記」も此の章段で終わる。何事もクライマックスは盛り上がるものだが是は平たく言えば「あの世の話」であるから景気の良い内容では無い。人類が宇宙に行く時代には知りたく無い？ことだが、遠い昔に一生懸命、創作した人が居たので笑い話として紹介して置く。

平将門の死後、当時の世間で次のようなことが言われていた。

平将門は前世の因縁で、東海道は下総の国・豊田郡に住んでいた。(徳川家康が江戸を開く迄は京都～常陸国府＝石岡間が東海道であった)

けれども将門は前世からの宿縁で日々、殺生に明け暮れて居り、少しも善根を施す事が無かった。其の将門も限り有る寿命で遂に滅んでしまった。其処で余計なことだが、世間の人々は（死後の将門が）何処へ行き、何処に生まれ変り、何処の家に宿っているのであろうか？と噂話をしていた。そうした中で、田舎に住む或る人が何の根拠も無いけれども次の様に言い触らした。

討たれた平将門は、今、仏道に言う三界の国（欲界・色界・無色界）六道の郡（天上・人間・修羅・畜生・餓鬼・地獄）五趣の郷（六道から「修羅」を除いたもの）八難の村（地獄・畜生・餓鬼・長寿天辺地・盲聾瘖痙・世智弁聡・仏前仏後）に住んでいるが中間地帯に居る使者に伝言して近況を伝えて来た。其れに依れば（以下は平将門の幽霊からの便りである）…私、平将門は世に在る時（生前に）一つとして善行を施したことが無かった。其の業の報いにより、今は悪道（地獄）に堕ちることとなって、表記の住所に苦しみながら棲んでいる。私を悪人として訴える者（亡霊）が地獄にも一万五千人（匹）程居て毎日、私を苦しめる。

悪業とされる活動をしていた現役時代は、多くの家臣たちに命じて行動させたのであるが、今は其の罪を私一人？で背負わなければならず、日々に多種多様な刑罰を科せられる。剣の柱に身を置き、鉄柵の中で火に焼かれ、食べ切れない程の毒を与えられるなど、忙しくて苦痛の毎日である。

然しながら、地獄でも労働基準法が適用されるようになり、近頃は月に一日だけだが休日が与えられることになった。それについて地獄の従業員が言うには…お前が現世（浮世）に居た頃、殊勝にも願掛けをした今光明経（今光明最勝王経＝聖武天皇が諸国に国分寺を建てることを決める基となった経典）の功徳である…とのこと。将門の霊は其の休日を利用して連絡をしてきたのである。

冥界の役人が用いる暦によれば「人間社会の十二年をもって一年とし、十二か月をもって一か月とし、三十日をもって一日とする」らしいから一年に一度の休日と言うことになる。

原本には「是を以て言うに、我が日本国の暦には九十二年に当たり、彼の本願を以て此の苦を脱る（のがる）べし…」とあるのは計算が合わないけれども架空の話であるから無視する。

残党追及が厳しかったから生き残りは居ないと思うが、地獄の苦しみに遭う平将門の霊魂は生き残った者たちに向かって、最後に次の様に叫ぶ。

どうか生き残った者たちよ！他の為に慈悲を施し、悪業を消す為に善根を積むことを心掛けて欲しい。美味で有っても精進を忘れて生きものを殺してはならぬ。たとえ心中に惜しんでも仏僧への施しを忘れてはならぬ…

将門記の最後は、寺院への施しを強調しているから此の著書が仏教関係者に依って書かれたことが分かる。「天慶三年六月中に此の文を書いた」と付記されており、正しく事変直後の記録である。

「将門記」は、あの世の話は兎も角、西暦九三九年から翌年にかけて郷土で起きた歴史的事件の貴重な記録であるから是非、多くの方々に知って頂きたいと願って稚拙な文章を書いたことを深くお詫びして筆を置く。

完

これにて打田升三の将門記　「罪と名声」が完了しました。近々「打田昇三の太平記」をお送りします。お楽しみに。

ふるさと風の会会員募集中！

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。

自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

会費は月額 2,000 円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

打田　昇三　0299-22-4400　兼平智恵子　0299-26-7178

伊東　弓子　0299-26-1659　木村　進　080-3381-0297

編集事務局　〒315-0014　石岡市国府 4-3-32　（木村）

HP　http://www.furusato-kaze.com/